

## 19世紀におけるメッカの「中心」性

—メッカ巡礼とヨーロッパ—

太田 啓子\*

### The Muslim Pilgrimage and European Countries during the Nineteenth Century

OTA Keiko

#### Abstract

The Hajj is the fifth pillar of Islam- a religious duty that must be performed at least once in the lifetime by all able-bodied Muslims who can afford to do so. Pilgrims must perform a series of rituals simultaneously in a fixed procedure, during a fixed period- from the eighth to the tenth day of the twelfth month of the Islamic calendar. Therefore, the Hajj has developed a religious identity in each Muslim who has performed the rituals.

Previous studies on this topic have focused on the relationship between Muslim countries and Hajj. However, only a few studies have discussed its significance in world history. In modern history, not only Muslim countries but also European countries have implemented Hajj-related policies. This article examines the Hajj policy of European countries during the nineteenth century and reveals the role that Hajj played in world history.

With the advent of European colonization across the world, devising a policy for the Muslim pilgrimage emerged as an urgent issue. European countries implemented many policies for pilgrims, such as a health policy through quarantines and transport to Mecca by steamships. However, they tried to exclude “dangerous” thoughts such as wahhabism, which the pilgrims brought into the colonies from Mecca. In conclusion, the Hajj policy by European countries was a part of their colonial policy; through these policies the European countries attempted to include the Muslim community into the new world order that they had constructed.

Keywords : History, Oriental History, Islamic History, Mecca, Pilgrimage

#### はじめに

B・アンダーソンはその著書『想像の共同体』において巡礼を2つのタイプに分けている。第一が宗教共同体を「想像」させうる巡礼であり、例えばキリスト教徒、イスラーム教徒、ヒンドゥー教徒がローマ、メッカ、ベナレスなどを聖なる地理の中心として観念し、行なう巡礼である。これらの宗教共同体の外縁は、人々がどこに巡礼するかによって決定される<sup>1</sup>。第二が官僚や軍人の赴任という、キャリアパターンの中で行なわれる「行政の巡礼」、そして勉学のための移住や留学といった「教育の巡礼」である。このタイプの巡礼は（主に植民地支

---

キーワード：歴史、東洋史、イスラーム史、メッカ、巡礼

\*お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科・リサーチフェロー

配において)「中心」と「その中心を頂く版図の広がり」を無自覚のうちに移動する人に意識させるという作用があり、結果としてネーションステートという枠組みが構築される土台となる<sup>2</sup>。

むろん、多くのイスラーム学者がメッカ巡礼への出立を契機として各地で学問を修得し、見聞を広めるなど「教育の巡礼」としての側面もあるものの、メッカ巡礼は第一のタイプに分類される。歴史的に見ても、大巡礼 *ḥajj* の宗教儀礼を通して「イスラーム世界」におけるメッカの中心性は形成され、大巡礼を行なった個々のイスラーム教徒の心の中にイスラーム共同体が「想像」され、その一員としての自覚が育まれてきた。

このメッカ巡礼に関してはこれまで歴史学、文化人類学、思想研究などの分野から、多面的な研究がなされてきた<sup>3</sup>。しかしながらいずれの研究も、イスラーム諸王朝とメッカ巡礼、イスラーム教徒にとってメッカ巡礼が持つ意味など、「イスラーム」の視点からの分析に留まり、世界史においてメッカ巡礼が果たしてきた役割に言及しているものは少ない。近代に着目すると、メッカ巡礼に主体的に関わってきたのはいわゆるイスラーム諸王朝だけではない。本稿においては、従来の研究において「イスラーム」の問題として捉えられてきたメッカ巡礼を、ヨーロッパとの関わり、という視点から検討する。

## 1. メッカ巡礼

前述のアンダーソンは宗教共同体の一例としてイスラーム共同体を取り上げており、その概念は2つの要素により具現化されるとしている。第一が啓典『コーラン』において使用されている古典アラビア語である。世界各地に存在するイスラーム教徒は口語によって互いの意志の疎通を図ることは出来なかったが、宗教においては古典アラビア語が用いられていたため言語の共通性は保持され、これは全イスラーム教徒に対し精神的一体感を植え付ける機能を持った<sup>4</sup>。

第二がメッカ巡礼であり、これはイスラーム教の五柱（イスラーム教徒が実践すべき5つの宗教的義務）の第5に位置づけられる<sup>5</sup>。『コーラン』においては「この家 *al-bayt* (=カアバ神殿) への巡礼は、そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である」（第3章97節）と述べられている<sup>6</sup>。その特徴は期間が定められていること（イスラーム暦第12月8-10日までの3日間）、定められた順序・方法で、必ず集団で行なうという二点にあり、結果としてイスラーム教徒にとっての一年で最大のイベントとなっている。その儀礼については預言者ムハンマドが632年に行なった「別離の巡礼」が前例とされ、現在までほぼそのまま踏襲されてきた。

このように、大巡礼の宗教儀礼の集団での体験を通じてイスラーム共同体は「想像」されてきたが、これに加えて実際には大巡礼に参加出来ない人々によっても、次の二通りの方法で共同体は「想像」されてきた。第一に、代替行為を通じた巡礼体験の共有が挙げられる。ハディース（預言者ムハンマドの言行録）においては、ムハンマドは大巡礼に参加していない人々に、アラファートでの立礼の日（イスラーム暦第12月9日）における断食を促したと言われている<sup>7</sup>。また、現代における巡礼体験の共有例としてはインターネットを通じた巡礼体験なども行なわれている<sup>8</sup>。

第二に、情報の共有を通じた体験共有が挙げられる。これは歴史的に大きく二種類に分けることができる。一つめは、年代記などに見られる毎年の大巡礼情報である。エジプト、イラク、イエメンなど各地で成立した年代記中には、王朝の君主自身による大巡礼、巡礼キャラバンの出立、巡礼ルートへの安全、メッカの政治状況、天候、物価などの情報が必ず記載され、実際に大巡礼に参加することが不可能な者によっても巡礼体験は共有されていた<sup>9</sup>。二つめに挙げられるのが、メッカ巡礼記文学の成立である。10世紀以降、北アフリカ、スペインなどからのメッカ巡礼が活発化するにつれ、メッカ巡礼記文学と呼ばれる記録文学ジャンルが成立した。これらの巡礼記はヒジャーズ巡礼記、メッカ巡礼記と呼ばれ、その内容は巡礼地理の案内、宗教的儀礼の手順、人的交流の記録など多岐に及ぶ<sup>10</sup>。こうしたメッカ巡礼記文学は19世紀末まで存在し、一種の共同体共有の財産として、イスラーム共同体の「想像」に深く寄与することとなった。近世以降はこれに他者からの視点として、ヨーロッパ人によるアラビア半島への旅行記も加わった。

## 2. イスラーム諸王朝とメッカ巡礼

前近代において、エジプト、シリア、イラク、イラン、イエメンなどに成立した歴代のイスラーム諸王朝は、軍事力を背景に権力を掌握、統治者の地位についた王朝であり、イスラーム法の施行および国内外の安全保障の責務を果たすことによるのみ世俗的支配権をイスラーム共同体に認証される存在であった。彼らにとって聖地メッカを支配し、毎年のメッカ巡礼を無事遂行することは、イスラーム教を尊ぶ君主としての宗教的権威を彼らに付与する行為であり、従って彼らはメッカの聖モスクにおけるフトバ（金曜日の集団礼拝で統治者として名前を挙げられること）、メッカにおける貨幣の鑄造、カアバ神殿に対する独占的なキスワ（カアバ神殿の覆い布）の奉納などを通じて、聖地メッカの支配者であることを内外にアピールした。また、王朝としての公式巡礼キャラバンの派遣、巡礼ルートの整備、メッカにおける喜捨、公共事業（聖モスクの補修事業、モスク、イスラーム学校、水利施設の建設事業）を行なうとともに、“二聖都の保護者”の称号を好んで用いた。近代以降も彼らにとってメッカが持つ重要性は同様であり、積極的なメッカ巡礼政策が行なわれた。

### ①巡礼者対策

19世紀以降、オスマン朝、ムハンマド・アリー朝、カージャール朝などのイスラーム諸王朝が実施したメッカ巡礼政策は①巡礼者対策、②交通政策に二別される。まず巡礼者対策であるが、これらの王朝はスエズ、ジッダなど巡礼ルート上の港湾都市に巡礼者の相談への対応や旅券の管理を行なう人物を任命し、巡礼者の保護・管理を行なった。1885年にイランからメッカ巡礼を行なったカージャール朝の外務官僚であるファラハーニーは、スエズ在住のアフマド・エフェンディという人物について、この人物がイラン、オーストリア、ブラジル政府の国旗を自宅に掲揚し、領事館業務を行っていたことに言及している<sup>11</sup>。また、短期間に多数の巡礼者の流れが集中するメッカおよび巡礼ルート上の中継都市（アレクサンドリア、スエズ、ジッダ、アデンなど）では、英国下院議会文書などにおいてコレラなどの疫病の発生が多数報告されているが、この状況に対し諸王朝はそれぞれ保健・衛生政策の一環として検疫所の設置を行なった<sup>12</sup>。

### ②交通政策

前近代において、メッカ巡礼では伝統的な陸上キャラバン、ダウ船や紅海内航行用の平底船などの船舶が交通手段として用いられてきた。19世紀半ば以降、これに蒸気船という交通手段が新たに加わった。船舶が一度に輸送可能な人数が増大したこと、巡礼に必要とされる日数が大幅に短縮されたこともあいまって、各地からメッカを訪れる巡礼者の数は急増した。1877-78年にメッカ巡礼を行なったJ・F・キーンはその旅行記において「巡礼の時期には何千人ものイスラーム教徒が世界中からメッカに集まる。その内のいくらかはキャラバンでアラビアの砂漠を横切って到着するが、それをはるかに超える数の人々が海路、何隻ものイギリス船でやって来る。私がこの旅行記を書いている時期には42,718名がジッダに上陸した。」と述べている<sup>13</sup>。これらの蒸気船はシンガポール、バタヴィア、カルカッタ（＝コルカタ）、ボンベイ（＝ムンバイ）、バスラ、バイルート、アレクサンドリア、アルジェ、チュニス、イスタンブルなどの諸港から出港した<sup>14</sup>。またアラビア半島内部の遊牧民による略奪行為の横行など治安の悪化を受けて、従来のキャラバンルートに替わって蒸気船が利用される例も現れるようになった<sup>15</sup>。

こうしたメッカ巡礼における交通手段の多様化に対し、オスマン朝、ムハンマド・アリー朝はそれぞれ船会社を設立、巡礼航路への参入を図った。またオスマン朝は黒海における蒸気船航路の規制を通じて、メッカ巡礼者をイスタンブルに集約することを試みた<sup>16</sup>。

こうした交通政策に加えて、イスラーム諸王朝によるメッカ巡礼政策として特筆すべきなのが、オスマン朝によるヒジャーズ鉄道建設である。これはオスマン朝スルタン＝アブデュルハミト2世（位、1876-1909）の建設計画によるものであり、メッカ巡礼振興を通じてオスマン朝臣民のイスラーム教徒としての意識の覚醒を促し、イスラーム共同体への帰属意識を強めることによりオスマン朝の支配権を強化しようとする汎イスラーム主義と深い関連があった。1900年に建設工事が始められたヒジャーズ鉄道は1908年にはダマスクスーメディナ間が開

通、営業開始したが、1914年の第一次世界大戦勃発により計画が頓挫した。しかしながら当初はメッカまで延伸される予定であり、オスマン朝によるメッカ巡礼政策としては極めて重要であった<sup>17</sup>。

以上、イスラーム諸王朝によるメッカ巡礼政策を挙げてきたが、その一方でメッカ巡礼が諸王朝に与えた政治的・社会的影響としてワッハーブ運動の北アフリカ、東南アジアへの伝播を挙げることができる<sup>18</sup>。また、ワッハーブ運動に対抗する上でおきた一連のイスラーム神秘主義改革運動も、メッカ巡礼による思想伝播の影響として看過することが出来ない<sup>19</sup>。さらに19世紀後半から20世紀にかけてはメッカ巡礼を回路としてアフガーニー(1838/9-97)、ムハンマド・アブドゥ(1849-1905)らの改革主義思想が広まり、その理論を継承したラシード・リダー(1865-1935)によって刊行された『マナール』は北アフリカ、中央アジア、東南アジアなど各地で読まれ、後のイスラーム復興運動に大きな影響を与えることとなった<sup>20</sup>。このように、情報の集結地であるメッカに赴いた者たちが様々な新しい思想を故郷へともたらすとともに、巡礼体験の共有によって創出された彼らの共同体意識が社会変革の原動力となる例は多数見られた<sup>21</sup>。彼らの運動が社会運動、反植民地闘争へと結びついていったことは、メッカ巡礼の持つダイナミズムを表していると言えるだろう。

### 3. ヨーロッパ諸国によるメッカ巡礼政策

18世紀末以降、ヨーロッパ諸国による世界各地の植民地化が進行するにつれ、植民地支配下におかれたイスラーム教徒の巡礼をどのように統制するかが喫緊の課題となった。こうした状況において各国は様々なメッカ巡礼政策を実施、その内容はメッカ巡礼者の健康管理、巡礼の交通手段の確保、さらには巡礼者が反植民地運動につながる思想をもたらず危険性の排除と多岐に及んだ。

#### ①巡礼者対策

まず巡礼者対策であるが、イギリス、オランダなどのヨーロッパ諸国はメッカ巡礼の時期における疫病発生リスクへの対応策として各地の主要巡礼港に検疫所を設置、巡礼者が蒸気船に乗る前の医療チェックの徹底を実施した。またこの時期、ジッダ、スエズなど各地に領事館を設立、メッカ巡礼向け蒸気船運航会社との連携を行なった。例えば1872年オランダはジッダに領事館を設立、翌年領事館からの直行便就航要請を受けて、オランダ系船会社による蘭領東インド各地からのメッカ巡礼者の直行便輸送が開始した。この政策の背景には、十分な資金を持たずにメッカ巡礼を行ない、故郷に戻ることが出来ずにヒジャーズに残留する者が増大していたという事情に加え、メッカが植民地政府に対する反政府運動の温床になっているのではというヨーロッパ諸国の危機感があった。特にアラビア半島を発祥の地とするワッハーブ運動について、ヨーロッパ諸国はその先鋭的で厳格な思想や政治・軍事勢力への発展性に脅威を感じ、危険勢力として認識していた。そのためこうした思想がメッカへの長期滞在者を介して植民地に流入することに警戒感を持っていた<sup>22</sup>。イギリス、オランダは植民地支配下のイスラーム教徒に対し、メッカ巡礼蒸気船の往復切符の購入を義務づけた上でパスポートを発給するという措置をとることでこの事態に対応することを試みた<sup>23</sup>。

#### ②交通政策

次に交通政策であるが、各地の主要巡礼港からジッダ、ヤンプゥまでのヨーロッパ系船会社による独占的運行が行なわれた。これらの船会社にはペニンシュラ・アンド・オリエンタル、アルフレッド・ホルト、オーシャン(イギリス系)、ネーデルランド、ロッテルダム・ロイド、オセアン(オランダ系)、ロイド(オーストリア系)、メサジュリ(フランス系)などが含まれ、アラビア半島の伝統的巡礼ガイド組織との相互依存関係が構築された。この政策を受け各地からのメッカ巡礼者数は急増、インドネシアの例を挙げると19世紀半ばには約2000人が、1870年代末には5000人以上がメッカ巡礼を行なった<sup>24</sup>。また、前述のヒジャーズ鉄道にはゲオルク・ジームス率いるドイツ銀行による出資が行なわれ、ドイツ製の蒸気機関車を使用されるなどドイツの技術支援が供与された。このヒジャーズ鉄道建設計画はオスマン朝によるメッカ巡礼政策ではあったが、その一方でドイツの中東進出計画の一環としての側面も持っていた。

こうした交通政策の一環として、イギリスの旅行会社トマス・クック(1841年設立)によるメッカ巡礼ビジネ

スへの参入が挙げられる。この背景にはトマス・クックのエジプト、エルサレム、インドへのビジネス展開があった。また、インド亜大陸、中央アジア、東南アジアからの巡礼者の劣悪な環境に対するオスマン朝からの非難に対し、巡礼者の保護がインド政府の急務となっていたこともその一因として挙げられる。1885年インド政府から旅行手配要請があったことを機に、トマス・クックは1887年にはメッカ巡礼バックツアーを開始、インド国内における鉄道切符の手配、出港地での宿の斡旋、蒸気船の往復切符の手配を開始した。当時のインドからのメッカ巡礼者数は約8000~12000人であったが、開始当初、全巡礼者のうち20%がこのツアーを利用したと言われている。このツアー事業は1893年に打ちきりになるまで、約25000人の巡礼者をメッカへと送ることとなった。この事業は資本主義的進出と捉えることも可能だが、その一方でトマス・クック社がこの事業から直接的利益を上げていないことから、むしろヨーロッパ諸国による中東政策に一企業が協力した事例であると考えられる<sup>25</sup>。

### ③イスラーム側の反応

以上、ヨーロッパ諸国もイスラーム諸王朝と同様、巡礼者対策、交通政策の両面でメッカ巡礼に主体的に関わった。これに対するイスラーム側の反応であるが、一般のイスラーム教徒からは巡礼者数の急増からも見て取れるように、巡礼手段の多様化として好意的に受け止められていたと考えられる。また支配層においては、蒸気船の就航、鉄道の運行などは国家と社会の近代化の一環としても、ヨーロッパ向け商品の輸送拡大の観点からも、積極的に推進された。ムハンマド・アリー朝の例を挙げても、アリー・ムバーラク（1823-93）などの近代的行政官僚、ムハンマド・アブドゥなど新しいタイプのイスラーム知識人は「キリスト教ヨーロッパ」と「近代」を区別して捉え、近代化についてはイスラームと矛盾するものであるとは認識していなかった。1869年にスエズ運河がフランスの主導で開通した際の開所式においてムハンマド・アリー朝のイスマーイル（位、1863-1879）は「エジプトはすでにアフリカではなく、ヨーロッパの一部である」と宣言したが、彼らにとって近代文明とは科学技術を意味し、イスラーム文明は科学の進歩の歴史の中に位置づけられたため、近代は決して排除すべき対象ではなかった<sup>26</sup>。その意味でメッカ巡礼における交通技術の進歩は彼らにとっても歓迎すべき変化であり、ヨーロッパ側がもたらした公共財を利用するという点においてイスラーム側は利益を享受する立場であったのである。

## 4. 19世紀のメッカ・シャリーフ政権

以上、イスラーム諸王朝およびヨーロッパ諸国とメッカ巡礼との関わりを見てきた。通常「イスラーム君主の政策」として言及されることの多いメッカ巡礼政策であるが、「イスラーム君主」ではないヨーロッパ諸国も主体的にメッカ巡礼政策を実施してきたことは明白である。では在地の政治勢力であるメッカ・シャリーフ政権がメッカ巡礼、およびもう一つのネットワークである国際商業とどのように関わってきたのかについて考察する。

### ①19世紀のメッカ

10世紀末、メッカを支配したのはシャリーフ（預言者ムハンマドの子孫）による政権であり、その後約1000年間にわたってエジプト、シリア、イラク、イエメンなどに成立した周辺諸王朝の間において、時に従属、時に自立性を示しつつ、ヒジャーズ地方の地域支配を担ってきた<sup>27</sup>。19世紀以降においても、メッカは基本的にはシャリーフ政権の支配領域であった。しかしながらメッカのイスラームの聖地としての性格およびその外港ジッダが国際商業ルート上の要所であったことから、メッカの支配権をめぐるにはオスマン朝、ワッハーブ派、ムハンマド・アリー朝、後にはヨーロッパ諸国（イギリス、フランス）、サウード家の利害が複雑に絡み合うようになった。1803年、アラビア半島内陸部のナジュドを拠点とするサウード家はメッカに侵攻、メッカをその支配下に置いた。しかしながら1813年、ムハンマド・アリー朝によるメッカ出兵が行なわれ、メッカはムハンマド・アリー朝の影響下において再びシャリーフ政権により支配されるようになった。1840年のロンドン四国条約締結後、ヒジャーズ地方はオスマン朝の影響下に入ることとなったが、1914年、シャリーフ・フサイン（1853-1931）はフサイン＝マクマホン書簡を通じてイギリスと接触、第一次世界大戦後のアラブ王国独立の承認を取り付けるとオスマン朝に対するアラブ反乱を開始した。1916年にフサインはイギリスの軍事援助を背景にヒジャーズ王を宣

言、1924年にはトルコにおいてカリフ制が廃止されたのを受けて、カリフ位就任を宣言した。しかしながら同年、サウード家のアブド・アルアズィーズ・イブン・サウード（1953没）によりメッカは陥落、ここにシャリーフ政権は消滅した<sup>28</sup>。サウード家は首都をリヤドにおき、メッカをメッカ州の州都としたため、メッカは政治的機能を消失、イスラームの聖地としての役割のみを維持することとなった。

## ②メッカ・シャリーフ政権とメッカ巡礼

気象条件の上で農耕が不可であり、農業に基づく租税収入が全く見込めないという地域の特殊性から、シャリーフ政権の経済的基盤はメッカ巡礼者からの関税およびメッカの外港であるジッダ経由の中継貿易（16世紀までは香辛料貿易、その後はインド洋貿易、コーヒー貿易）からの関税収入であった<sup>29</sup>。シャリーフ政権によるメッカ巡礼者への課税であるが、これにはジッダ入港時に巡礼者の所持品に課される関税、巡礼者本人の入市税、メッカで売買される商品への物品税などあらゆる種類の間接税が含まれた。ジッダの取引に関して、1814年にメッカ巡礼を行なったブルックハルトは、ジッダの主要な交易としてコーヒー貿易とインド洋貿易を挙げている<sup>30</sup>。このうちコーヒー貿易は季節制限のない貿易であった。インド洋貿易に関しては、季節的な制限があり、ブルックハルトによるとカルクッタ、スーラト、ボンベイからの商船が5月初めにジッダに到着、商品はジッダ商人が買い付け、スエズ経由でカイロへ輸出、その後ヨーロッパへと流通していった。その後船は6月にはベンガル行きが、7、8月にはスーラト、ボンベイ行きが出航、入れ替わりにマスカット、バスラ、モザンビークからの奴隷船が到着した。商人達はこれらの商品を1、2月まで売買せず、4、5ヶ月は寝かせるのが常であり、その利益率は30-40%になった。

これらのジッダ経由の国際交易とメッカ巡礼には密接な関係があり、巡礼の時期まで商品をジッダに保管した後にメッカに運び売買を行なうとさらなる利益率の上昇が見込まれた。また、メッカ・シャリーフ政権も積極的に国際交易に従事し、シャリーフ＝ガーリブは400トン船2隻を所持、その他イエメンとのコーヒー貿易用に多数の小型船を所持、穀物貿易にも参与していた。メッカに影響を及ぼしていたイスラーム諸王朝とシャリーフ政権との関税の配分比率は時期によって異なり、その時々々の政治状況が反映された。

このように、メッカ・シャリーフ政権はその財源をメッカ巡礼および国際商業に依存する一方で、政治的にはヒジャーズ周辺の諸勢力（オスマン朝、ワッハーブ派、ムハンマド・アリー朝、イギリス、フランスなど）のパワーバランスの上に存立していた。ナポレオンによるエジプト占領期（1798-1801）においては、メッカ巡礼および国際商業をめぐるシャリーフ政権、フランス、イギリスおよびオスマン朝の間で複雑な駆け引きが行なわれた<sup>31</sup>。メッカ巡礼と中継貿易のみに財源を依拠するという経済的事情を抱えるシャリーフ政権にとって最も重要なのはエジプトとの関係であり、そのためフランスに対しても従来通りエジプトからのメッカ巡礼キャラバンの派遣を要請した。一方、シリア、パレスチナ方面への進出を中東政策として掲げるフランスにとって、預言者ムハンマドの子孫であり、聖地メッカを支配するシャリーフ政権と良好な関係を築くことは必須であった。またイギリスにとってはインド洋、紅海、地中海における東インド会社の利権問題およびジッダへの在外商館建設問題がこの時期最重要であったため、フランスへの対抗策としてシャリーフ政権に対する積極的なアプローチを行なった<sup>32</sup>。この三者の関係に、エジプトの支配権復活を狙うオスマン朝が加わり、複雑な政治状況が現出された。こうしたアラビア半島への覇権をめぐるイギリス、フランスの関係は、ワッハーブ派によるアラビア半島支配末期（1818年～）におけるムハンマド・アリー朝と両国との連携関係にも見て取ることができる<sup>33</sup>。

## おわりに

以上、イスラーム諸王朝、ヨーロッパ諸国双方によるメッカ巡礼政策および19世紀のメッカの政治・経済状況を考察してきた。イスラーム諸王朝にとってメッカ巡礼政策とは、7世紀のイスラーム勃興以来一貫して王権強化の一手段としての性格を持っていた。また、近代においてメッカ巡礼は、従来通りの宗教共同体を「想像」する機能を果たしていたのみならず、植民地支配下の「イスラーム世界」全体にワッハーブ運動、イスラーム改革主義、汎イスラーム主義といった新しい思想が広まっていく回路としての役割を担い、結果として「ヨーロッパ」と相対する新たなイスラーム共同体意識を創出する契機となった。一方、ヨーロッパ諸国によって行なわれた

メッカ巡礼政策とは植民地政策の一環であった。彼らは植民地ごとの分割支配（直接支配、経済支配）を行ないながら、メッカ巡礼に代表されるイスラーム教徒の移動と反植民地運動に対処する必要に迫られており、そうした国際状況の中で実施された様々なメッカ巡礼政策はある意味、メッカの求心力を利用してヨーロッパを中心とする国際秩序にイスラーム共同体を帰属させようとする試みであった。このことを鑑みるに、19世紀という帝国主義、植民地主義の時代においてもメッカはその「中心」性を保持していたのであり、メッカ巡礼はイスラーム共同体を「想像」する機能とともに、ヨーロッパを中心とする国際秩序の構築という、両義的な機能を担っていたと結論づけることが出来る。しかしながらメッカをめぐる両者の関係は決して敵対的なものではなかった。その背景には近代化を進めるイスラーム諸王朝の姿勢があり、イスラームと近代の調和を追求するイスラーム知識人の認識があり、巡礼の大衆化、国際化を歓迎すべきものとして受け入れた一般大衆の存在があった。

## 註

- 1 ベネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』（社会科学の冒険 II 期 4）、書籍工房早山、2007年、pp.98-99。「イスラーム世界」という概念は、この第一の巡礼によって「想像」される宗教共同体と同一のものと言えらる。
- 2 『想像の共同体』、第四章参照。アンダーソンは第二の巡礼として南米の事例を挙げているが、植民地支配期の朝鮮半島なども同様の事例として挙げることが出来る。朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学—』山川出版社、2005年。
- 3 メッカ巡礼に関しては以下の様な研究がある。Eickelman, Dale.F. and James Piscatori (eds.), *Muslim Travellers, Pilgrimage, Migration, and the Religious Imagination*, London, 1990; Faroqi, Suraiya, *Pilgrims and Sultans: The Hajj under the Ottomans*, London, 1994; Netton, I. R. (ed.), *Golden Roads, Migration, Pilgrimage and Travel in Medieval and Modern Islam*, London, 1993; Pearson, M.N., *Pious Passengers: The Hajj in Earlier Times*, London: C. Hurst, 1994; Peters, F.E., *The Hajj: The Muslim Pilgrimage to Mecca and the Holy Places*, Princeton: Princeton University Press, 1994; Sandar, Ziauddin, and M.A.Zaki Badawi (ed.), *Hajj Studies*, London: Croom Helm, for the Hajj Research Centre, King Abd al-Aziz University, Jidda, 1978; 川床睦夫編『シンポジウム「巡礼Part I + II」』中近東文化センター研究会報告 No.7-8、1986-87年。
- 4 『想像の共同体』、p.36.
- 5 なお本稿ではメッカ巡礼として大巡礼のみを取り上げ、任意の時に個人で行ないうるカアバ参詣である小巡礼(umra)には言及しない。
- 6 日本ムスリム協会『日垂対訳・注解 聖クルアーン』1982年、p.75.
- 7 「私はアラファの日(断食)ではアッラーに前年の罪と来る年の罪をお許し下さるようお願い、アーシューラーの日(イスラーム暦第1月10日)の断食では以前の罪のお許しを祈願する」(磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳『日訳 サヒーフ ムスリム』日本サウディアラビア協会、1987-89年、第2巻、p.241-243)。なお、大巡礼に参加している者については、礼拝や祈願に体力を使うべきであり、断食してはならないとされている。
- 8 Islam Online (本社：カタール)がSecond Life上で提供している「バーチャル・ハッジ」などのSNSサービスが一例として挙げられる。これらのサービスにおいてはWeb上で大巡礼を体験することが可能であり、巡礼者同士でチャットすることも可能である。<http://www.islamonline.net/ar/Page/Home>参照。
- 9 これには現代におけるメッカ巡礼報道との類似性が見られる。巡礼行事のハイライトであるアラファートでの立礼の儀式の様子はイスラーム諸国のみならず、アメリカ、ヨーロッパ諸国など多くのイスラーム教徒を擁する国々において中継放映される。
- 10 家島彦一「マグリブ人によるメッカ巡礼al-Rihlatの史料性格をめぐって」『アジア・アフリカ言語文化研究』25、1983年、pp.194-216。これらの巡礼記文学の主な書き手は北アフリカ、スペイン、イラン、インドからの巡礼者であった。使用言語はアラビア語が主であるが、ベルシャ語、ウルドゥー語などでも著された。例としてナースィル・ホスロー-Nāṣir Khusraw (1061没)、イブン・ジュバイルIbn Jubayr (1217没)、イブン・パトゥータIbn Battūta (1368/69もしくは1377没)、近代に入ってからにはファラハニー-Farahānī (1912没)、山岡光太郎 (1959没)などの巡礼記が挙げられる。
- 11 Farahani, Mirza Mohammad Hosayn, *A Shi'ite Pilgrimage to Mecca, 1885-86*, edited, translated from Persian and annotated by Hafez Farmayan and Elton L. Daniel, Austin: University of Texas Press, 1990, p.171.
- 12 一例として、House of Commons Parliamentary Papers, 1875[c.1370] Public health. Reports of the medical officer of the Privy Council and Local Government Board, New series, no.V. Papers, concerning the European relations of Asiatic cholera, submitted to the Local Government Board in supplement to the annual report of the present year参照。こうした状況を受け、スエズにはムハンマド・アリー朝が、ジッダにはオスマン朝が検疫所を設置、手数料と引き替えに証明書の発行業務を行っていた (*A Shi'ite Pilgrimage to Mecca*, p.171, 176)。
- 13 Keane, J.F., *Six Months in Meccah: An Account of the Mohammedan Pilgrimage to Meccah*, London: Tinsley Brothers, 1881.

- カルカッタの英国国教会の司祭の息子であったキーンJohn F. Keaneは1877-78年、32歳の時にインドからメッカ巡礼を行なった。イスラーム暦第9月に単独でジッダに到着したキーンはウルドゥー語に堪能であったことからインド人巡礼者達の集団に加わり、Muhammad Aminの名でメッカ巡礼を行ないメッカ、メディナに滞在、帰国後旅行記を著した。ちなみにキーンが巡礼を行なったこの年にメッカ巡礼を行なった人々の数は180,000人を超えた。Wolfe, Michael (ed.), *One Thousand Roads to Mecca: The Centuries of Travelers Writing about the Muslim Pilgrimage*, New York, 1997, pp.245-275.
- 14 坂本勉『イスラーム巡礼』(岩波新書677) 岩波書店、2000年、pp.66-69.
- 15 1864年にインドからメッカ巡礼を行なったBhopalの王妃Nawab Sikandarの巡礼が、キャラバンルートの治安悪化の一例として挙げられる。1863年、伯父、母、数百人の随行員を含む王妃の一行はボンベイからメッカ巡礼に出立、翌1864年ジッダに上陸した。一行はメッカ巡礼の後、メディナへ向かう予定であったが、巡礼ルートの治安悪化を受けて断念した。こうした治安状況の悪化を受け、メッカからメディナへ向かうのにヤンプウ経由で海路を選ぶ者も現れた。彼女の巡礼記はのちにビクトリア女王(1819-1901)に献呈された。The Nawab Sikandar, Begum of Bhopal, *A Pilgrimage to Mecca*, translated from Urdu and edited by Mrs. Willoughby-Osborne, London: W. H. Allen, 1870; *One Thousand Roads to Mecca*, pp.226-244.
- 16 『イスラーム巡礼』, pp.69-70. オスマン朝はバツミ、トラブゾン、オデッサなどの黒海の諸港からやってくる船舶をイスタンブル止まりとし、エーゲ海、地中海方面への船の直行便を認めないことにより、巡礼者をイスタンブルに集約させる交通政策を実施した。
- 17 Landau, Jacob M., *The Hejaz Railway and the Muslim Pilgrimage: a Case of Ottoman Political Propaganda*, Detroit, 1971; Nicolson, James, *The Hejaz Railway*, London: Stacey International, 2005.
- 18 中村覚編『サウジアラビアを知るための65章』明石書店、2007年、pp.24-29. 18世紀後半にアラビア半島の内陸部ナジュド地方でハンバル派法学者ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ(1703-91)によって創始されたワッハーブ主義は、メッカ巡礼者のネットワークに乗り各地に伝播、ワッハーブ運動と呼ばれるイスラーム改革運動を生み出した。この一例としてインドネシアで起きたパドリ戦争(1821-37)が挙げられる。Dobbin, Christine, *Islamic Revivalism in a Changing Peasant Economy: Central Sumatra, 1784-1847*, London and Malmö: Curzon, 1983参照。
- 19 『イスラーム巡礼』, pp.125-158. これらの運動はネオ・スーフイズムとも称され、イブン・イドリース(1750-1837)による改革的イスラーム神秘主義運動やこれに影響を受けたハトミー教団、サーリヒー教団の誕生などが挙げられる。また、後に反植民地運動と結びついたサヌーシー教団の誕生や、西アフリカにおけるトゥクロール帝国の成立などもこの一連の流れに位置づけられる。
- 20 インドネシアの改革派イスラーム団体であるムハマディヤ(1912年設立)の設立者であるアフマド・ダフランなど、アフガーニーやアブドゥの思想をインドネシアに広めた改革主義運動初期の指導者達はいずれもメッカで学んでいる。彼らの経歴についてはNoer, Deliar, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia, 1900-1942*, Kuala Lumpur; New York: Oxford University Press, 1973参照。
- 21 巡礼体験の共有などによって創出されたムスリムの共同体意識について、M・F・ラファンは“Islamic ecumenism”という用語を用いている。Laffan, Michael Francis, *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma Below the Winds*, London: Routledge, 2003参照。しかしながらラファンは巡礼体験により東南アジア出身者(ジャワ)としての共同体意識も同様に創出されたと論じている。
- 22 ワッハーブという名称はヨーロッパ人を含む、運動外部の者たちによって用いられた他称であり、しばしばサワード家の運動と直接関係を持たない、反植民地的イスラーム改革運動を指すのに用いられた。例えばイギリスは、1840年代半ば以降インド北西部においてイギリスと敵対したムジャーヒディーン運動を、ワッハーブ運動と具体的な関連を持たないにも関わらず、ワッハーブ運動と呼んだ(『岩波イスラーム辞典』, 岩波書店、2002年、pp.965-966, 1080, 1081.)。
- 23 國谷徹「19世紀末の蘭領東インドからのメッカ巡礼について—巡礼パスポート制度の展開過程を中心に—」『日蘭学会会誌』29(1)、2004年、pp.15-28; 同「東南アジアからのメッカ巡礼と植民地支配」『自然と文化そしてことば04 インド洋海域世界一人とモノの移動—』2008年、pp.34-41; Kathirithamby-Wells, J. and J. Villiers, *The Southeast Asian Port and Polity, Rise and Demise*, Singapore, 1990; 白石隆『新版インドネシア』, NTT出版、1996年。
- 24 『イスラーム巡礼』, pp.72-73, 115-117; 國谷徹「19世紀末の蘭領インドにおけるメッカ巡礼—汽船ルートの形成における地域的差異について—」『東南アジア史学会会報』(72)、2000-05年、pp.13-14; 『岩波イスラーム辞典』p.490.
- 25 Brendon, Piers, *Thomas Cook: 150 years of Popular Tourism*, London, 1991. (ピアーズ・ブレンドン著、石井昭夫訳『トマス・クック物語—近代ツーリズムの創始者—』中央公論社、1995年、pp.350-357.) トマス・クック社はインド人顧客に対し、「我々は政府の代理として行動している。この事業から当社は全く利益を上げておらず(少なくとも直接の利益はない)、政府は単に掛かった実費を契約金額を上限として支払ってくれるだけである。」との声明を出した。
- 26 加藤博『「イスラームvs.西欧」の近代』(講談社現代新書1832)、講談社、2006年、pp.92-95, 121, 132.
- 27 OTA Keiko, “The Meccan Sharifate and its diplomatic relations in the Bahri Mamluk period,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 17/1, 2002, 1-20; Pesce, Angelo (ed.), *Makkah a hundred years ago or C. Snouck Hurgronje’s remarkable albums*, London: Immel Publishing, 1986; De Gaury, Gerald, *The Rulers of Mecca*, New York, 1991 (first published in London, 1951); Peters, F.E., *Mecca: A Literary History of the Muslim Holy Land*, Princeton: Princeton University Press, 1994; フィルビー、ジョン著、岩永博・富塚俊夫訳『サウジ・アラビア王朝史』法政大学出版局、1997年。



- 28 Teitelbaum, Joshua, *The Rise and Fall of the Hashimite Kingdom of Arabia*, New York, 2001. フサインの子息はシリア、イラクにおいて王権を樹立したがいずれも後に共和制となり、その名はヨルダン・ハシミテ王国The Hashimite Kingdom of Jordanへと継承された。
- 29 インド洋貿易に関しては次の研究が挙げられる。Chandra, S. (ed.), *The Indian Ocean, Exploration in History, Commerce and Politics*, New Delhi, 1987; Lombard, D. and J. Aubin (eds.), *Marchands et hommes d'affaires asiatiques dans l'Océan Indien et la mer de Chine 13e-20e siècles*, Paris, 1988; Haellquist, K.R. (ed.), *Asian Trade Routes: Continental and Maritime*, Copenhagen, 1991. 中継港ジッダに関しては次の研究を参照。Diyāb, Aḥmad Ibrāhīm, "al-'Alāqa bayna Jidda wa Sawākin (allati kānat tabī'a li wilāya Jidda) fi fatra al-ḥukm al-'Uthmānī," *Studies in the History of Arabia*, vol.1, *Sources for the History of Arabia*, part 2, Riyadh, 1979, 207-220; Ferret et Galinier, *Voyage en Abyssinie: dans les provinces du Tigré, du Samen et de l'Ambara, dédié à s.a.r. Monseigneur le duc de Nemours*, Paris: Paulin, 1847; Parkyns, Mansfield, *Life in Abyssinia: being notes collected during three years' residence and travels in that country*, London: J.Murray, 1853 (2nd ed., new impression, London: Cass, 1966); Pesce, Angelo, *Jiddah: Portrait of an Arabian City*, Falcon Press, 1977.
- 30 Burckhardt, John Lewis, *Travels in Arabia. Comprehending an Account of those Territories in Hedjaz which the Mohammedans regard as Sacred*, The Echo Libraries, 2006 (first published in London, 1829, edited by William Ousely); Sims, Katherine, *Desert Traveller: The Life of John Lewis Burckhardt*, London: Victor Gollancz, 1969.
- 31 Abir, M., "Relations between the government of India and the Sharifs of Mecca during the French invasion of Egypt, 1798-1801," *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1965, pp.33-42.
- 32 イギリスは親仏的なシャリーフをアミール*amīr* (メッカの統治権保持者) から廃位し、親英的なシャリーフをアミール位に就任させようと画策した。
- 33 イギリス・インド政府はワッハーブ派に対抗する上でムハンマド・アリー朝との連携 (イギリス海軍とムハンマド・アリー朝の陸軍) を模索、アラビア半島出兵中のムハンマド・アリー朝軍のもとにサドラー大尉Captain George Foster Sadleirを派遣した。一方フランスも、ムハンマド・アリー朝のイエメン遠征にタミシエを同行させた。Tamisier, Maurice O., *Voyage en Arabie. Séjour dans le Hedjaz. Campagne d'Assir*, Paris, 1840.